

第 31 期青少年問題協議会意見具申素案 【概要】

「生きづらさを抱える若者への社会的自立に向けた支援について」(仮称)

はじめに

第 1 章 生きづらさを感じている若者の現状

1 若者を取り巻く生活環境 (本文 1 頁～3 頁)

- (1) 現在の若者の全体像
 - ・ 家庭や地域の支えの脆弱化 (親と子供で構成されている世帯が増加)
 - ・ 急速なスマートフォンの普及 (高校生88.8%)
 - ・ 若者の生活圏の「内閉化」 (実際の社会でもネット上の交流において自分の環境と似通ったところで閉じる傾向)
 - ・ 「自己肯定感」を有する若者は5割弱 (諸外国は8割前後と高い)
- (2) 社会的自立に困難を有する若者の現状
 - ・ ひきこもりは、都内で推計約 2 万 5 千人
 - ・ 中途退学者は、都立高校と私立高校を合わせて、約 4 千人程度
 - ・ 刑法犯少年は減少しているが、再犯者率は 3 割強と高い。

2 若者の支援に関する現在の主な取組 (本文 4 頁～7 頁)

- (1) 若者全体への相談支援
- (2) ひきこもり等の若者への支援
- (3) 非行歴を有する若者への支援

第 2 章 社会的自立に困難を有する若者や家族が、状況に応じて必要な相談支援を受けることができない要因

1 支援を受けた方が望ましい状況にあるが、その必要性を認識していない段階

(本文 8 頁～9 頁)

- 社会全体として他人事との思いが強く、悩みを抱えている若者の自立支援の必要性について理解が十分浸透していると言えない状況
- 若者や家族が問題状況を認識していても、自力で解決しなければいけないと思っているケースもある。
- 若者や家族に対して、支援に関する情報が十分に届いていない。

2 支援の必要性は認識しているが、相談先を見つけることができない段階

(本文 9 頁～10 頁)

- 若者や家族が抱えている課題が複合的であったり、自らの課題を整理できない場合は、最初にどの窓口にご相談したらよいか判断できない。

- 所属や関係が途切れ、どこに相談していいのかわからなくなる場合がある。
- 悩みや課題を近隣の人に知られたくないという気持ちから、身近な地域では相談を躊躇するなど、相談機関を利用しづらいと感じる場合もある。

3 支援機関等に相談したが、適切な支援に繋がらない段階

(本文10頁～12頁)

- 悩みを持つ若者は、それを自分の言葉で相手に伝えることが苦手な場合が多い。家族も負い目を感じている場合など、相談窓口で十分に伝えきれないことがある。
- 支援機関側も悩みの本質を聞き取ることができず、見立てが不十分になり、適切な支援機関につなげないことがある。
- 分野ごとの支援にとどまり、複合的な課題に対応しきれず、支援の切れ目が生じていることがある。

4 若者を社会全体で支える必要性 (本文12頁)

第3章 若者が社会的に自立し活躍できる社会の実現に向けた仕組みづくり

1 未来のために都民のすべてが若者をサポート (本文 13 頁～15 頁)

～若者支援を身近に感じられる情報発信～

(1) 社会全体で若者の生きづらさに寄り添う「サポーター意識」の浸透

- ・ 社会全体で若者を支えるために、サポーター意識を浸透
- ・ 人に頼り頼られることを前向きに捉えられるようなメッセージを発信

(2) 若者や家族の心に響く SNS 等を活用した情報発信

- ・ 支援機関の認知度を高めること
- ・ 若者や家族の行動パターンを踏まえた、SNS 等を活用した情報発信
- ・ 若者や家族が相談を受けることのハードルを下げるような内容で情報発信

2 支援のハブ・ステーション「若ナビα」 (本文 15 頁～18 頁)

～若者や家族が相談しやすい環境の整備～

(1) 誰でも、どんなときも、どんな悩みでもまずは頼れる支援の入口「若ナビα」

- ・ 若ナビαやサポートネットは、ハブ・ステーションとして機能強化
- ・ 若ナビαは、どんな局面でも受け止め誰にとっても身近な存在であること
- ・ 若ナビαが、支援機関からも信頼され、活用されるようにすること

(2) 誰でもどこでも悩みの相談先をネットで探せる「ポータルサイト」の構築

- ・ 若者や家族が安心して利用できる支援機関を容易に検索
- ・ 支援機関がリファー先を検討する際に、複数の支援機関を比較可能

(3) 身近な地域で支援を受けられる環境づくり

- ・ 区市町村の窓口整備の加速化に向け、都の支援策のさらなる充実
- ・ 社会参加応援事業実施団体の支援の充実や団体の増加に向け、取組促進

(4) 支援力を高める能力開発・研修

- ・ 支援者個々の知見や能力を高め、支援機関の支援力も向上

3 どんな悩みも取りこぼさない「スクラム連携」（本文 18 頁～20 頁）

～若者や家族に寄り添った重層的な支援～

(1) 若者や家族の悩みや思いを橋渡しする「代弁者」機能

- ・ 抱えている悩みや思いを橋渡しする「代弁者」機能が重要。若ナビαやサポートネットで実績を積み、将来的には、各支援機関での仕組みを模索

(2) スクラム連携の調整役「コーディネート」機能

- ・ 関係機関の役割分担や連携に関する総合調整を行う「コーディネート」機能が不可欠。若ナビαやサポートネットで実績を積み、区市町村に還元

(3) 若者や家族の多様な悩みを多様な支援機関が、得意分野を生かしてスクラム連携

- ・ どのような悩みや課題もと取りこぼさない、密接なスクラム連携
- ・ リファーする際には、柔軟で漏れのない情報共有

第4章 若者がいきいきと輝ける社会へ（本文 21 頁～22 頁）

～青少年期から自己有用感を持てるような環境づくり～

- ・ 様々なボランティア活動に日常的に関わる機会が必要
- ・ 自己有用感を高めるより良い人間関係を築ける SNS 等の使い方の検討
- ・ 少年非行をより一層効果的に防止するための施策のあり方を検討

おわりに